

老子の文章を評す（承前）：論説

著者	内田，周平
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 1
ページ	1 - 4
発行年	1895-12-17
URL	http://hdl.handle.net/2298/4718

龍南會雜誌第四拾壹號

論 說

老子の文章と評す (承前)

教授 内田周平

四 警句鍊語に富めること

警句は西洋の修辭學に「エムファシス」といひ、文中特に簡勁の語より成り、命意奇警にして人の心目を驚絶聳動し、その間に愉快を領せしむるものなり。伊藤仁齋先生十七歳の時三井寺に登りて琵琶湖を望み男兒勿_レ空死、大哉神禹功の詩を咏せり。この男兒勿_レ空死は即ち一の警句なり。朱文公八歳の時孝經を讀みてその上に若不如_レ此、便不做_レ人の語を題せり。この不做_レ人は亦一の警句なり。世人は二先生が少時語を下すの非凡なるを見てその人物の如何に英哲なりしやを想像するを得ん。鍊語は一般に精練琢磨したる語言を謂ふものにて、其包むところ廣し。蓋し警句ハ意味の上より看、鍊語ハ語言の上より看ると雖も兩者往々相通じてその一方に定置_レ難きものあり。何んとなれば警句となるものは多くその語言を鍊磨したるものにして其語言を鍊磨_レたる者は亦多く警振の文句を成せばなり。この警句鍊語の中に於て屢々知言、格言等を見る。知言の尤も超妙なる者は、或は沈思冥想の中に得、或ハ一旦豁然の頃に出づ。世人乃ちこれを稱して悟道の語といひ、達人の言といふ。晋人の清談は玄を談すと曰ふと雖も實は老莊大易の知言と違社騷流の雋語とを雜_レえ用ゐし者に似たり。宋の王應麟が世說新語を評して清以浮といひしハ蓋しその格言を見ざりしを以てならん。然れども浮の病原は寧ろ莊に在りて

老に在らず吾れ老子の文を觀るにその警句ハ大概反言より成りその鍊語は大概對句より成る而してその中に知言あり格言あり或ハこれを起頭に置き或はこれを結尾に用う文是に於て乎平凡ならずと謂ふべし

甲 單句

上善若水第八章寵辱若驚第十三章希言自然第二十三章

道善貸且成第四十一章 聖人被褐懷玉第七十章 正言如反第七十八章

前の三句は章の首にあるもの後の三句は章の尾にあるもの

乙 對句

無名天地之始、有名萬物之母第一章常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼同上處無爲之事、行不言之教第二章虛其心、實其腹、弱其志、強其骨第三章挫其銳、解其紛、和其光、同其塵第四章持而盈之、不如其已、揣而銳之、不可長保、第九章金玉滿堂、莫之能守、富貴而驕、自遺其咎同上甚愛必大費、多藏必厚亡第四十四章爲學日益、爲道日損第四十八章圖難乎其易、爲大于其細第六十三章輕諾必寡信、多易必難同上合抱之木、生于毫末、九層之臺、起于累土第六十四章欲不欲、不貴難得之貨、學不學、復衆人之所過第六十四章

以上は大抵章の中間に在るもの

丙 對句の反言

道可道非常道、名可名非常名第一章天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已第二章天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗第五章大道廢有仁義、智慧出有大僞第十八章絕聖棄

民利百倍、絶仁棄義、民復孝慈第十九章上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德第三十八章禮者忠信之薄而亂之首、前識者道之華而愚之始同上大成若缺、其用不弊、大盈若冲、其用不窮第四十五章慈故能勇、儉故能廣第六十七章

以上は大抵章の首に在るもの

丁 反言

夫唯弗居、是以弗去第二章非以其無私耶、故能成其私第七章有之以爲利、無之以爲用第十一章終不爲大、故成其大第三十四章不笑不足以爲道第四十一章知我者希則我貴第七十章無以生爲者、是賢于貴生第七十五章

以上は大抵章の尾に在るもの

戊 單句の反言

絶學無憂第二十章道常無爲而無不爲第三十七章天下之至柔馳騁天下之至堅第四十三章治大國若烹小鮮第六十章大國者下流第六十一章

以上ハ皆章の首に在るもの

右甲乙丙丁戊の中には或ハ諺語的表彰と相出入する者もあるべし之を括論すれば對句よりは單句の方多く聲響を爲す中間に在るよりは首尾に在る方多く聲響を爲せり戊の例ハ即ち單句にして起首に在るものの中に就き天下之至柔馳騁天下之至堅ハ勁援比なし老子に非れば決して言ひ得ず後來淮南子原道訓中水喩の一段、莊子秋水篇中風喩の一段共にこの意を衍説したる者なり治大國若烹小鮮ハ何等の妙語ぞ一語以て千萬言の經濟策に抵るに足る漢の曹參ハ善くこの意を解して齊の大國

を治め綽々として餘裕ありき

(未完)

日本小説につき一言すると共に獨逸小説を論ず

講師 三谷金女三

西洋ハ進化の親とて洋風を欣慕せ、苟も西洋のものなりとせば、善惡の差別もなく我國に輸入し、宛も西洋あるを知りて自國あるを忘却したるは、實に今を去る僅々八九年前の事なりとす。斯くの如き時世に遭遇したる憂國有爲の士は、痛歎慷慨し、暗涙を袖にして、切齒扼腕、以て是を度外視するの愚を學ばず、大に發憤えて以て憤慨の情を吐露し、より、世は漸く一變きて西洋に心酔するの迷夢も忽然として醒んとするに會せり。然りと雖も西洋的熱度は一朝にして冷却するの功を奏せんとは、こは思ふても及ばざる所、是亦止むを得ざる事にして、當今に至るも西洋とし聞けば拍手喝采して是を歡迎するが如し。かくの如き有様なるにも關係せず、西洋に於て歡迎且つ獎勵せらるゝ一種の美術にして、我邦に於て大に排斥せらるゝ所のものあり。西洋に於て可とせざるも、西洋を其故郷として產出したるものは、我邦の卒先して輸入する所なるに、西洋に於てすら歡迎且つ獎勵までの光榮を得たる其美術と、我邦に於て排斥せらるゝと謂はゞ、讀者諸君は其不可思議なるに喫驚せずんばあらず。抑も此不可思議なるものは是れ如何なる美術なるか。

俄然吾人の斯く開陳を試みたるは、宛も度詞を發して讀者諸君の腦裡を痛めんとするものなるが如くなるも、敢て吾人が遊戲的に疑問を發し、ものにはあらず、大に吾人の疑惑に堪えざる所にあなれば、特に讀者の腦をわづらわし、然る後に其不可思議なる美術の何者たるかを發表せんと欲すればな